

価値に触れて価値を知る

——フッサールと情動の知覚説——

八重樫 徹

私たちの身の回りの世界は、価値をもったものであふれている。隣家の庭に咲いたあじさいの花、使い慣れたノートパソコン、道路工事の騒音、猛スピードで走る車、ニュースで知った殺人事件。これらはいずれも価値をもっている。価値とは対象がもっていたりいなかったりする性質の一種であり、その中にはプラスの価値(美しさ、善さ、使いやすさなど)とマイナスの価値(不快さ、危険さ、恐ろしさなど)がある。

何がどのような価値をもっているのかについて、私たちは(少なくとも見かけ上の)知識を得ることができる。価値についての知識の中には、何らかの感情を抱くことを通じてはじめて得られるものがあるように思われる。たとえば、夜の山道を危険だと思っていた人が、はじめて夜の山道を歩くとき、置かれている状況の危険さを「肌で感じる」。このときに生じているのは一種の認識だが、感情の動き——この場合は恐怖——を本質的な要素として含んでいるように思われる。この点でそれは、道の脇にブナの木があることを知覚によって知ったり、夜が明けるまであと5時間あることを推論によって知ったりするのは違ったタイプの認識である。価値についての認識のうちの少なくとも一部は、本質的に情緒的なプロセスだと考えられる。

本稿の目的は、初期現象学の感情論を手がかりに、価値の知識と情動のかかわりについての説明を提示することにある。以下ではまず、価値の情緒的認識というものが存在するという考えに一応の正当化を与える(1)。次に、初期現象学に見られる、価値の情緒的認識に関する二つの立場——一方はフッサールに、他方はシェラーに代表される——を定式化する(2)。これらを比較してみると、フッサールの立場の方がより妥当な説明であることがわかる(3)。この立場は、情動を知覚と類比的に考える点で、現代の情動の哲学においても一定の支持を得ている情動の知覚説(Perceptual Account of Emotion)の一形態とみなせる。そこで、情動の知覚説

の妥当性を検討し、最終的にフッサールの立場が価値の認識を説明する上で有効なものであることを明らかにする (4, 5)。

1. 価値の知識と情動

私たちの情緒的経験はさまざまな種類の体験を含んでいる。そのなかで主要な地位を占めている一群の体験が、情動 (emotions) と呼ばれる。典型的に情動に数えられるものには、喜び、悲しみ、恐怖、怒り、嫌悪感などがある。これらに共通する特徴の一つは、その個別例がつねに「何かについてのもの」だという点にある。私たちは、友人の訪問を喜んだり、祖母の死を悲しんだり、地震を恐れたり、無礼な発言に怒ったりする。志向的对象が十分に分節化されていない情動はあっても、まったく志向的对象を欠いた情動というものはない。情動はたんなる主観的な感じ (feeling) ではなく、志向的な体験である。

志向的体験にはさまざまな種類があるが、その中でどのような特徴をもったものが情動と呼ばれるのだろうか。友人の訪問を喜ぶとき、私はこの出来事をうれしいこととして受け取っている。地震を恐れるときには、将来の天変地異を、生存を脅かす危険なこととみなしている。情動の志向性は、志向的对象を何らかの価値をもったものとして表象する志向性である。

情動が志向的对象に帰属させる価値は、実際にその対象がもっているものである場合もあれば、そうでない場合もある。対象の現実のあり方によって、情動は適切なものであったり、そうでなかったりする。対象が実際に生存を脅かすものであれば、それへの恐怖は適切だったと言える。対象が実際に喜ばしいものならそれへの喜びは適切であり、実際に不潔であるならそれへの嫌悪感は適切である。それぞれの情動に対応する価値は、情動の適切さの条件をなしている。

本稿では、以上のような特徴をもった体験を情動と呼び、考察の対象とする。それゆえ、「あらゆる情動は志向的なのか」とか、「そもそも情動について適切さを問うことができるのか」といった問いは考察の外に置く¹。

さて、具体的な対象について情動を抱くことは、対象の価値を知ることとどのように関係しているのだろうか。私たちは「価値を知っていること」について日常的に語っている。ある絵画の価値について、実際にそれを見た人の方が見ていない人よりも——その他の点が同じなら——「よく知っている」と言われる。ある人がおこなった行為がどれくらい悪いことなのかについて、その行為がなされた現場にい

1. これらの問いをめぐる議論については、たとえば以下を参照。Cf. Deonna & Teroni 2012b, chap. 1 and 2; De Sousa 2014; 服部 2014.

なかった人よりはいた人の方が——その他の点が同じなら——「よく知っている」と言われる。このように、私たちの日常的な言語実践は、「人は価値について、たんに個人的な意見をもつだけでなく、知識をもつことができる」という直観を反映しているのである。

では、価値について知っていると言われる人は、他の人とどう違うのだろうか。美術館で一枚の絵画を前にしたとき、批評家なら、それを優れた絵だと判断する理由を詳しく述べることができるだろう。構図の巧みさ、主題に込められた画家の意図、同時代における革新性、後世に与えた影響など、作品そのものとその背景についてのさまざまな知識が、価値判断の理由として挙げられうる。これに対して、素人が同じ絵を見る場合には、「なぜこれが良い絵だと思うのか」と尋ねられても、明確な理由を述べることはできないのが普通だろう。専門家の価値判断と素人の価値判断は、正当な理由にもとづいているかどうかという点で異なる。知識の名に値する価値判断と、そうでない価値判断との一つの違いは、正当化の有無にある。

価値判断は正当化されたりされなかったりする。これは価値判断が他の種類の判断と共有している特徴である。非価値的な判断と同様に、価値判断も、正当化されていなければ知識にはなりえない。正当化を欠いた価値判断も価値判断には変わらないが、認識論的に不十分であり、いまだ知識とは呼べない価値判断なのである。

さて、価値についての知識というものが存在するとして、それを支えているものは何だろうか。どのような意識の働きがそれを成り立たせるのだろうか。価値判断の正当化には、さまざまな要素が含まれうる。それらの中で、特権的な役割をもつように思われるのは、対象の価値に自分で実際に「触れて」、「心を打たれた」という経験である²。

批評家がある絵画について書物から豊富な知識を得て、その絵画が美しいと判断したとしても、もし彼がその絵を一度も見たことがなかったとしたら、彼の価値判断は十分に正当化されてはいないと言いたくなる。背景知識では劣っていたとしても、実際にその絵をみて心を動かされたことのある人の方が、その絵の価値にかぎっては、批評家よりもよく知っているのではないか。また、あなたが友人から、ある店のラーメンが美味しいと聞いたとする。そこで、自分ではまだその店のラーメンを食べたことがないにもかかわらず、あなたは「あの店のラーメンは美味しい」と判断する。数日後、実際にその店でラーメンを食べてみると、たしかに美味しかった。食べる前と後で、そのラーメンについてのあなたの価値判断は内容においては違いがない。しかし、二つの間には正当化に関して重要な違いがあるように思わ

2. 「価値に心を打たれる」という表現をはじめとして、本節の議論はマリガンの仕事 (Mulligan 2009; 2010) に多くを負っている。だが、次節以下で提題者がとる立場はマリガンのそれとは異なるばかりか、対立関係にある。

れる。

これらの例が示しているのは、価値判断がいわば対象の価値についての直接的な気づきの経験をともなっているか否かの違いである。この直接的な気づきの有無は、判断の内容には反映されない。にもかかわらず、直接的な気づきは判断を知識に近づける。「近づける」と言ったのは、それをともなう判断がつねに十分に正当化されているとはかぎらないからである。絵を見たときやラーメンを食べたときの感動は、薬物などの影響により、真正なものではなくなっていたかもしれない。また、気づきが真正なものだったとしても、他の要素(批評家をこき下ろしたいという欲求や、友人に対するひそかな憎しみなど)によって価値判断が歪められることもありうる。だが、価値についての気づきの真正性や価値判断の動機的基盤に瑕疵がなければ、気づきを伴う価値判断はそうでない価値判断よりも認識論上の優位を占める。

「心を打たれる」という言い方が示唆しているように、ここでいう価値の直接的気づきは、対象の知覚と同じではない。同じ絵画を見知っている人でも、その絵画の価値についての直接的気づきをもっていない人もいるかもしれない。造形芸術というものに全く触れたことがなく、たんなる色のついた表面としてしか見ない人はそうだろう。また、脳の損傷などにより、情緒が低下している人もそうかもしれない。価値に気づくことは、情緒の動きを本質的に含む。

ここまでくれば、価値の情緒的知識とここで呼んでいるものがどのようなものなのかがかなり明確になったのではないだろうか。すなわち、価値の情緒的知識とは、正当化された価値判断のうちで、対象の価値についての直接的気づきをともなっているもののことを言う。

心を打たれることによって、私たちは対象の価値に直接的に気づく。そして、こうした気づきを欠いた価値判断は、少なくともある種のケースでは、知識という名に値しない。この主張には議論の余地があるが、ここではそれに完全な正当化を与えるつもりはない。本節の目的は、価値の情緒的知識というものが存在する¹という考えのもっともらしさを示すことにすぎないからである。また、「あらゆる価値は見知りの対象になりうる」と主張するつもりもない。以下では、「価値のうちのあるものは情緒的な経験を通じて直接に知られる」と仮定する。そのうえで、そのような情緒的認識が、どのような種類の意識の働きによって実現されるのかを、初期現象学者たちとともに考えてみたい。

2. 初期現象学の二つの見解

本節では、価値の情緒的認識をめぐって、初期現象学に見られる二つの対立する

見解を定式化する。

第一の立場はフッサールに代表される。シュタイン (Stein 1917) も同様の立場をとっており、また初期現象学者には通常数え入れられないが、マイノング (Meinong 1917) とコルナイ (Kolnai 2004) もこの立場の支持者とみなすことができる。この立場は、具体的価値を認識する働きは、恐れや喜びや悲しみ等々の情動によって実現されると考える。以下ではこの立場を「情動説」と呼ぶ。第二の立場は、シェーラー (Scheler 1916)、ガイガー (Geiger 1911)、ヒルデブラント (Hildebrand 1916) といったいわゆる実在論的現象学者によって支持されている。彼らによれば、情動とは別に価値感得と呼ばれる特殊な意識の働きが存在し、価値の認識はこれによって実現される。こちらの立場を以下では「感得説」と呼ぶ。

二つの立場の対立は、価値の情緒的認識という機能が情動の内に存するか、それともその外に存するかをめぐるものである。また、二つの立場は情動の本性についての異なる見解として特徴づけることもできる。情動説が情動を具体的価値へのアクセスを含むものとみなすのに対し、感得説によれば、情動自体はそうしたアクセスは含まず、価値感得にもとづく受動的な反応だということになる³。以下、それぞれの代表的な支持者のテキストを手がかりに、二つの見解を定式化したい。

2.1. 情動説

フッサールは、具体的な対象を価値をもったものとして直接に——推論などを介さずに——把握する意識の働きを、「価値覚 (Wertnehmung)」と呼んでいる。

われわれはいわば価値の、あるいはむしろ価値によって特徴づけられる客観の、直接的な気づき (Kenntnisnahme) を有している。それはわれわれが端的な価値覚と呼んだものである。(XXXVII, 292)

「価値覚」とは価値 (Wert) と知覚 (Wahrnehmung) を合わせたフッサールの造語である。次の引用に見るように、彼は価値覚を通常の知覚と類比的に考えている。また、そこでは価値覚が本質的に情緒的な意識の働きだとされている。

価値客観を価値客観として原的に構成する意識は、必然的に、情緒の領分 (Gemütssphäre) に属する要素を含む。最も根源的な価値構成は、感じる自我

3. 八重樫 2013 は、二つの見解を情動に関する見解として対比している。そこで「把握説」と呼ばれているものがここでいう情動説に、「反応説」と呼ばれているものがここでいう感得説にあたる。また、本提題ではそれぞれの立場をフッサールとシェーラーに代表させるかたちで紹介したが、他の論者により広く目を配った整理として、Ferran 2008, chap. 6 を参照。

主体のあの（言葉の広い意味で）前理論的で享受的な没入としての情緒のうちでなされる。そのような情緒をあらわすために、私はすでに十年以上前に講義で価値覚という表現を用いた。この表現は、感情の領分に属する知覚の類似物をあらわすものである。（IV, 9）

享受的な没入とは、「自我が『自ら』感じつつ客観のもとに居合わせているという意識のうちに生きているような、そうした感情作用（Fühlen）」（IV, 9）のことであり、たとえば音楽を聴く（cf. XXXVII, 75）、葉巻を吸う（cf. A VI 12 II: 37a）、美しい女性の姿を見る（cf. A VI 8 I: 45a）といった、具体的な対象の価値を味わう体験を意味しており、フッサールはそれを、情緒的な心の動きを伴わない述定的な価値判断から区別している。

フッサールのいう価値覚は、対象の価値の直接的な把握であると同時に、いわば認知的な基盤にもとづけられた作用でもある。女性の容姿の美しさに気づくためには、その身体を見ていなければならない。この場合、価値覚は知覚に基づけられている。同じ女性の美しさに写真を見て気づくこともあるように、価値覚の認知的基盤は像意識である場合もある。いずれにせよ、対象の何らかの非価値的な性質の認識にもとづいて価値を情緒的に把握するのが価値覚の働きである。したがって、フッサールの情動説によれば、価値の情緒的認識は、価値についての直接的な気づきという側面と、非価値的な認知に基づけられた作用という二つの側面をもっている。

以上、主にフッサールのテキストを手がかりに、情動説を特徴づけてきた。まとめるとこうなる。

情動説：価値の情緒的認識は、(a) われわれが通常情動と呼ぶものによって実現され、(b) 情動は知覚と類比的であり、(c) 対象の非価値的な性質を認識する別の作用を認知的基盤としてもつ。

2.2. 感得説

シェーラーによれば、われわれがふつう情動と呼ぶもの、つまり怒りや悲しみや喜びは、価値的なものへの本来の意味での志向的なかわりをもたない。それは、情動が意識に与えられたものに対するたんなる受動的な反応であって、何かを意識に与える働きを欠いているからである。反応とは一般にあらかじめ与えられたものに対してのものであるから、価値への反応が同時に価値を与えるものであることは不可能である。そして、価値を意識に与える働きは、情動ではなく価値感得という独特の作用に存する。この価値感得こそが本来の意味で価値への志向的なかわりをもつ。「怒りが喚起されるためには、何らかの害悪（Übel）があらかじめ感得によつ

て把握されていなければならない」(Scheler 1916, 272)。怒りの情動は、後からの反省によって害悪という対象の価値と結びつけられることはあるが、はじめからそれと志向的にかかわっているわけではない。

ヒルデブランドは、感得と情動の区別と関係を、やはり怒りを例にしながら、印象深い仕方で描いている。

街で子どもが虐待されているのを見て、私の心に激しい怒りが湧き上がったとしよう。私は目の前の行為の野蛮さと残酷さに怒る。この怒り自体は明らかに、野蛮さと残酷さを受け取ること (Haben) ではなく、私がすでに気づいているこれらの性質への応答 (Antwort) である。言い換えれば、すでに私の目の前に与えられている対象に対する態度決定 (Stellungnahme) である。(Hildebrand 1916, 137)

シェラーもヒルデブランドも、感得を具体的な価値についての直接的な気づきとして特徴づけ、命題的な知識から区別している。「目の前の行為は悪である」といった述定的判断は、価値を感じ取った後ではじめて成立するものである。価値感得と述定的な価値判断の関係は、知覚と知覚判断の関係と類比的である。この点で、感得説もフッサールの情動説と同じく、価値の情緒的認識を知覚との類比関係に置いていると言える。両者の違いは、価値の情緒的認識という働きを情動に認めるか、それとも情動とは別のものに帰すかという点にある。

また、シェラーらの感得説は、価値感得を他の認知的体験によって基づけられていない作用とみなす。情動は価値感得に基づけられているが、後者は価値を根源的に与える作用である。

以上をまとめて感得説を定式化するとこうなる。

感得説: 価値の情動的認識は、(a') 情動とは異なる価値感得によって実現され、(b) 知覚と類比的であり、(c') 認知的基盤をもたない。

3. 情動説の優位

前節での定式化をふまえて、本節では、感得説に対する情動説の優位を明らかにする。価値の情動的認識というものが存在するとすれば、それは価値感得のようなものによって実現されると考えるよりも、情動によって実現されると考える方が妥当である。

まず、感得説がその存在を主張する価値感得という作用は、控えめに言っても疑わしいものである。価値感得のようなものを私たちの日常心理学の中に見いだすことは難しい。価値感得について私たちが手にすることのできる特徴づけは、「価値性質の実例についての非命題的な知識を与える（情動とは異なる）心的エピソード」という程度の形式的なものにすぎない。情動については、私たちははるかに豊かな仕方で特徴づけることができる。情動には、怒り、恐れ、悲しみ、喜び等々の種類があり、（明確に同定できるかどうかは別として）種類に応じたさまざまな感じ（feeling）と身体的変化を伴うものであり、さまざまな仕方で私たちの認知や行為と互いに影響を及ぼしあうものであるということ、私たちは日常の経験や心理学者の説明を通じて知ることができる。だが、価値感得はそうした経験的リソースから切り離されたアイテムであるように思われる。要するに、価値感得の本性についての直観を私たちはほとんど持ち合わせていないのである。

もちろん、感得説の支持者は、価値感得の存在を私たちに直観的に受け入れさせようと努力している。シェラーは言う。あなたは同一の痛みを、苦しむ、耐える、享受する等々、さまざまな仕方で経験することができる。これらの異なる経験の仕方を通じて同一の価値的なものが経験されているとすれば、異なる応答のモードから区別して、痛みを与える同一の働きが存在すると考えなければならない、と（cf. Scheler 1916, 270）。しかし、この議論は説得力を欠いているように思われる。というのも、なぜ同一の価値的なものが異なる仕方で経験されていると考えなければならないのだろうか。痛みを苦しむときと、痛みを享受するときでは、置かれている身体状態は同じだったとしても、それに対する評価の仕方は異なるように思われる。だとすれば、異なる価値を把握していると考えの方が自然ではないだろうか。

では、先ほど引用したヒルデブラントの記述はどうだろうか。児童虐待を目にして憤りを覚えるとき、憤りそのものは反応的態度であり、それが向かっているところの価値はあらかじめ与えられると彼は言う。彼が描いている状況は容易に想像できるものだが、彼が与えている説明が唯一の妥当な説明というわけではない。もしこの説明が説得力をもつとしたら、「情動は反応的態度にすぎない」という前提に私たちが同意している場合にかぎられる。また、仮にこの前提が受け入れられるとしても、彼が持ちだしている価値感得という概念は、上述のように、私たちの直観の中に対応物をもたない。日常的直観に場所をもたない概念であっても、それが現象の説明に役立つなら認めてもよいではないか、と感得説の支持者は言うかもしれない。だが、そのように言えるのは、より疑わしさのない概念によって置き換えることができない場合にかぎられる。価値感得が果たすとされる説明上の役割が、より私たちの直観に対応した概念によっても果たせるのなら、価値感得という疑わしい概念を導入する必然性はなくなる。

まさにこの点に、情動説の利点がある。具体的な価値についての直接的な気づきという現象が、情動という馴染みのあるものによって説明できるなら、その説明は価値感得を用いる説明よりも良い説明である。

以上で、情動説が感得説よりも妥当な説明であることが明らかになった。次にすべきことは、前者がたんに後者に比べればましというだけでなく、価値の情緒的認識についての満足のいく説明だということを示すことである。そのために、次節以下では、情動と知覚のアナロジーの妥当性について論じる。フッサールの情動説は、情動を知覚と類比的に考える点で、情動の知覚説の一形態とみなすことができる⁴。情動の知覚説は現代の情動の哲学においてそれなりに支持されている立場だが、批判もある。フッサールの立場を擁護するには、そうした批判に答え、情動と知覚のアナロジーを守る必要がある。

4. 情動はどこまで知覚に似ているのか

情動はどんな点で知覚に似ているだろうか。私たちが情動を抱くときには、対象がある価値をもったものとして現れてくる。犬を怖れるときには犬が危険なものとして、他人の行為に憤るときにはその行為が不当なものとして、プレゼントに喜ぶときにはそれが喜ばしいものとして、表象される。このとき、危険さや不当さや喜ばしさは、私たちが対象に能動的に帰属させるものではなく、受動的に受け取るものである。(1) 対象がある性質をもったものとして現れるということ。また (2) そのような現れを主体が受動的に受け取るということ。これら二つの特徴は、通常の感覚的知覚と共通のものであるように思われる。

情動も知覚も、対象の現れ方を主体が能動的にコントロールできないという意味では受動的だが、いずれの場合でも、主体はたんに存在するものをあるがままに受け取るというわけではない。感覚器官の構造や状態の違いによって知覚的な現れが異なるように、情動によって得られる価値的な現れも主体のあり方に左右される。この意味で、(3) 知覚と情動はともに主観的な要素をもつ。だが、(4) どちらも(主体の状態についてのものではなく)世界の中の対象についてのものであるという意味では、客観的、あるいはこう言った方がよければ、志向的である。

以上は、情動と知覚の間に比較的議論の余地なく認められる類似点である。だが、情動の知覚説は——そしてフッサールの情動説も——さらに突っ込んだ類似性を主

4. 現代における情動の知覚説の支持者には、ロバーツ (Roberts 2003)、タポレ (Tappolet 2000)、デーリング (Döring 2007) などがいる。彼らの立場の間にはもちろん違いがあるが、われわれの議論には影響しないため、ここでは無視する。

張する。その際、アナロジーの一方の項として考えられるのは、真正な (veridical) 知覚ではなく、幻覚や錯覚でもありうるような知覚経験である。知覚経験が対象の現実のあり方に適合したりしなかったりするように、情動にも適合的なものとそうでないものがある。つまり、(5) 知覚経験も情動も、適切性条件をもつ。真正な知覚経験 (つまり知覚) は事物の色や形や運動についての知識を与えてくれる。そして——これが最も議論の余地のある点だが——、適切な情動は対象の価値についての知識を与えてくれる。つまり、(6) どちらも適切ならば知識の源泉になりうる。

仮に以上の点で情動が知覚と似ていたとしても、当然ながら両者の間には違いもある。「情動は認知的基盤をもつが、知覚はもたない」という点は重要な違いの一つである。しかし、この点はまさに情動を価値の表象として考えることの核心である。上で定式化したフッサールの説明 (価値認識の情動説) にも、この違いは不可欠な要素として含まれていた。それゆえ、この点で情動が知覚と異なることを認めても、情動の知覚説を捨てる理由にはならない。

これと関連して、「情動には理由を問えるが、知覚には問えない」という違いも、われわれが支持する情動の知覚説の脅威にはならない。たしかに、情動の主体に対しては、「なぜ悲しむのか」「なぜ怖がるのか」等々と問うことができる。しかも、因果的説明を求めるのではなく、正当化を求めるタイプの「なぜ」の問いを立てることができる。これに対して、「満月が見えるね」と言う人に対して、正当化を求めて「なぜ見えるの？」と問うことは奇妙であり、意味をなさない。だが、この違いは、認知的基盤をもつかどうかという点に由来している。犬を怖がる人に対して正当化を求めるとき、予想される答えはたとえば「吠えるから」とか「咬むかもしれないから」とか「言葉が通じないから」といったものだろう。これらの答えは、その人が抱いている恐怖という情動の認知的基盤を表現している。この種の正当化が知覚に対しては与えられないのは、知覚が情動と違って認知的基盤をもたない以上、当然のことである⁵。

これまでのところ、情動と知覚を類比的に捉える立場は、もっともらしく思える。だが、情動と知覚の間には、この立場に困難を突きつけるような違いもある。次節ではこの困難を取り上げ、情動の知覚説の立場から対処を試みる。

5. 情動と観点：情動の知覚説を擁護する

情動を価値の知覚として特徴づけることはどれくらい妥当なのだろうか。情動を

5. ヘルムはここで取り上げた二点の他にもいくつかの相違点を挙げ、それらが情動の知覚説にとって無害であることを論証している。Cf. Helm 2015, 418-420.

もつことによって、何かがある価値をもったものとして現れる。対象の価値的な現れ方は、誰にとっても同じというわけではない。通常の意味での知覚では、同じ場所から同じものを見ればだいたい同じように見える。しかし、価値的な現れは、情動を抱く主体のあり方に大きく左右される。同じものや出来事が、ある人にとっては好ましいものとして現れ、別の人にとっては気持ち悪いものとして現れることがある。たんに人々がそれぞれ異なる情動を抱くというだけでなく、どのような情動を抱くのが適切であるかも、対象と主体が置かれている文化的背景によって変わらうように思われる。豚肉を食べることはある文脈では特に嫌悪すべきことではなく、好ましいことですらあるが、別の文脈では嫌悪し忌避すべきことになる。

通常知覚においても、主体のあり方によって対象の見え方が変わることはある。身長などの身体的特徴、視力などの身体能力、あるいは薬物の影響などの生理的状態によって、物の見え方は変わる。これらの条件によって対象の現れ方が左右されることは、情動を知覚と類比的に語ることを妨げない。しかし、主体がもっている文化的背景のような要因についてはどうだろうか。たとえばどのような宗教を信仰しているかによって、事物知覚のあり方が変わるといったことはありうるだろうか。事物知覚の対象の候補に価値的なものをあらかじめ含めるのでないかぎり、そのようなことは考えにくい。物の形や色は、知覚主体の文化的背景にかかわらず同じように見える。したがって、情動を通じた対象の価値的な現れ方が文化的背景に左右されることは、情動の知覚説を拒否する正当な理由になる。

この反論に対して、知覚説の支持者は次のように反論するかもしれない。色などの知覚的性質も、文化によって異なる現れ方を示す。よく知られているように、虹の色の数や配列は、文化によって捉え方が異なる。こうした例を考えるなら、文化的背景が現れ方に影響を及ぼすという事実は、情動と知覚の類比を妨げない、と。しかし、たとえば虹の色のようケースと豚肉食のケースを、同列に扱うことはできない。虹を何色と見るかの違いは、同じスペクトルをどの程度細かく分節化するかの違いにすぎない。7色と見る人も5色と見る人も、赤と紫（あるいは明るい色と暗い色）を両端にもつ帯として虹を見ていることには変わらない。これに対して、豚肉食に対する情動的な反応は、文化によって180度違ったものになる。いわば、色の知覚に関しては論理的可能性にすぎない逆転スペクトルが、価値の表象においては現実に成り立っているのである。

では、次のように考えてみてはどうだろうか。同じものについてある人が「白い」と言い、別の人「黒い」と言っていると。このとき、二人とも適切な知覚をもっており、正常な判断を下しているとは考えられない。どちらかが間違っているのである。これと同様に、同じ対象の価値について二人の人が正反対の情動的反応をする場合には、どちらかが間違っているのだ、と。たしかに、このように言える

なら、情動と事物知覚のアナロジーを守れる。また、対立する情動的反応のうち一方が適切で他方は不適切であるようなケースも実際にあるだろう。しかし、そうした説明は一般化できない。豚肉食のケースは、まさにそうした説明を拒否するケースの一つである。豚肉を食べることをよしとする人と、嫌悪する人は、どちらもその人の文化においては適切な情動をもっている。そして、一方の文化だけが正しいなどということはないはずだ。

以上のように考えるなら、知覚の正しさと情動の適切さ、そして知覚的性質と価値性質の間に存在する重要な差異を認めざるをえない。価値は、色のような知覚的二次性質には見られない独特の相対性をもつ。それは、主体の文化的なあり方によって 180 度異なるものにさえなりうるという強い相対性である。情動の知覚説はこの差異に対処できるのだろうか。それともこの立場は見込みのないものだったのだろうか。

次のように考えることで対処が可能になると思われる。まず、対象がもつ価値は、観点に相対的な性質だと考えられる⁶。たとえば、豚肉を食べるという行為タイプを一つの対象として見るなら、それは〈観点 A における望ましさ〉、〈観点 B における汚らわしさ〉等々、観点相対的な多くの価値をもっている。ここでいう観点には、栄養学的観点、疫学的観点、道徳的観点、経済的観点、そして宗教的観点など、さまざまなものが含まれる。また、対象がどのような価値をもつのかは、その対象の内在的なあり方だけによって決まるのではなく、それが置かれている状況によっても変わる。豚肉食の（宗教的および道徳的観点における）価値は、イスラム教徒の間でなされるときと、仏教徒の間でなされるときとは、違ったものになる。

つまり、〈端的に望ましい〉とか〈端的に悪い〉といった価値は存在せず、価値はいつでも状況依存的で観点相対的な性質だということになる。このように考えることは、恣意的ではなく、価値の本性にかなったことだと言えよう。価値をもった対象とは、いわば見る角度と置かれる場所によって色を変えるプリズムのようなものである。この比喩が当を得たものであるとすれば、そのかぎりでは、情動と知覚のアナロジーも依然として妥当である。どのような情動が適切であるかは、主体がどのような観点から対象を捉えるか、また対象がどのような状況に置かれているかによって変わる。物がどのように見えるのかも、見る角度と置かれている環境によって変わる。

たしかに、価値は知覚的性質よりも強い意味で相対的である。だが、この違いは、「観点」に何が含まれるかの違いによって説明できる。物の見え方を左右する「観点」は、ほぼ文字通りの観点、つまり視点のことであり、対象に対する距離や角度

6. 価値の観点相対性は、情動の知覚説に反対する論者の多くも認めている。たとえば以下を参照。cf. Deonna & Teroni 2012a; Helm 2015.

といったものにつきる。せいぜいそこに主体の身体状態や概念的分節化のキャパシティが付け加わるにすぎない。だが、価値的なあり方を左右する「観点」には、上で挙げたようなさまざまな尺度が含まれる。さらに、同じ対象を経済的観点と栄養学的観点と道徳的観点から捉えるといったように、同時に複数の観点から見ることもできる。このことによって、適切な情動的反応は、適切な知覚経験よりもはるかに幅広いものになっているのである。

おわりに

これまでの議論によって、次のことが明らかになった。情動の認識論的役割を説明する上で、情動を知覚と類比的に捉える立場は、情動と知覚の間のさまざまな違いにもかかわらず、有効である。ある対象に対する適切な情動が、ひいてはその対象の価値が、文化的背景によって左右されることを認めたとしても、情動の知覚説を捨てる理由にはならない。ただ、価値が観点相対的で状況依存的な性質であることを正しく受け入れればよい。

以上の議論はフッサールが明示的には述べていない多くのことを含んでいるが、本稿が支持する情動の知覚説は、フッサールの立場と整合的であるばかりか、彼のアイデアに依拠している。このことは、情動と価値のかかわりを考える上で、初期現象学が手がかりを提供してくれることの実証にもなるだろう。

論じることができなかった問題も多く残されている。一つだけ触れておこう。ある対象の価値を知ることは、特定の状況と特定の観点における価値を適切に認識することだけにつきるわけではない。われわれは対象の価値をより深く知ろうと努力することができるし、実際により深く知ることができる。知覚経験と同じく、情動を通じた価値経験も、進行することによってより豊かになっていくものである。価値経験の進行には、自分が適切な情動を抱くだけでなく、他人の情動を理解することも含まれるように思われる。コミュニケーションによる発展可能性を考えることは、情動と価値の理論の課題の一つである。この課題に関しても、フッサールやその他の初期現象学者のアイデアが手がかりになると思われるが、残念ながらここでこれ以上詳しく述べることはできない。

参考文献（フッサールの著作を除く）

Deonna, J. and Teroni, F. (2012a). “From Justified Emotions to Justified Evaluative Judgements”, *Dialogue* 51 (1): 55-77.

- . (2012b). *The Emotions: A Philosophical Introduction*, Abingdon, Oxon: Routledge.
- De Sousa, R. (2014). "Emotion", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/emotion/>>.
- Döring, S. (2007). "Seeing What to Do: Affective Perception and Rational Motivation", *Dialectica* 61 (3): 363-394.
- Ferran, I. V. (2008). *Die Emotionen: Gefühle in der realistischen Phänomenologie*, Berlin: Akademie.
- Geiger, M. (1911). "Das Bewusstsein von Gefühlen", in: A. Pfänder (ed.), *Münchener Philosophische Abhandlungen*, Leipzig: Barth, pp. 125-162.
- Helm, B. (2015) "Emotions and Recalcitrance: Re-evaluating the Perceptual Model", *Dialectica* 69 (3):417-433.
- Hildebrand, D. v. (1916). "Die Idee der sittlichen Handlung", *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung* 3: 126-251.
- Kolnai, A. (2004). "The Standard Modes of Aversion: Fear, Disgust, and Hatred", in: B. Smith & C. Korsmeyer (eds.), *On Disgust*, Chicago: Open Court, pp. 93-109.
- Meinong, A. (1917) [1968] "Über emotionale Präsentation", in *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, Bd. III, Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt.
- Mulligan, K. (2009). "On Being Struck by Value: Exclamations, Motivations and Vocations", B. Merkel (ed.), *Leben mit Gefühlen: Emotionen, Werte und ihre Kritik*, Paderborn: Mentis, pp. 141-161.
- . (2010). "Emotions and Values", in: P. Goldie (ed.), *Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*, Oxford: Oxford University Press, pp. 475-500.
- Roberts, R. (2003). *Emotions: An Essay in Aid of Moral Psychology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Scheler, M. (1916) [1954]. *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik (Gesammelte Werke, Bd. 2)*, Bern: Francke.
- Stein E. (1917) [2008]. *Zum Problem der Einfühlung (Edith Stein Gesamtausgabe, Bd. 5)*, Freiburg: Herder.
- Tappolet, C. (2000). *Émotions et valeurs*, Paris: Presses Universitaires de France.
- 服部裕幸 (2014) 「情動の本性」、信原幸弘・太田紘史 (編) 『シリーズ新・心の哲学 III : 情動篇』、勁草書房、31-66 頁。
- 八重樫徹 (2013) 「価値把握と感情：フッサールの『価値覚』概念をめぐって」、『哲学雑誌』第 128 巻第 800 号、176-193 頁。